

第70回 近畿地区卒業設計コンクール応募作品一覧

平成28年4月7日
日本建築学会近畿支部

《短大・高専・専修学校の部》

No.	作 品 名	学生氏名	所 属	図面枚数
1	門真ンション ～生き続ける集合住宅～	矢野 幸樹	中央工学校OSAKA 建築学科	10
2	HOME BASE HOME	中津 真	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	39+3
3	裁きの光と空間	綾 晴香	京都建築専門学校 建築科二部	13
4	蜂の巣みんなの巣	宮師 麻希	中央工学校OSAKA 住宅デザイン科	15
5	BIG TRIANGLE WILL INSPIRE YOU	稲垣 亮輔	修成建設専門学校 空間デザイン学科	4
6	点をつなぐ小さなソウサ —コーポラスはりま民間賃貸集合住宅 空き部屋利用計画—	二星 大暉	明石工業高等専門学校 建築学科	6
⑦	趣味建築	石崎了一朗	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	27
8	未来とのつながり ～Connection to the future～	宮本 佳奈	中央工学校OSAKA 建築CGデザイン科	6
⑨	逃げ場のないまち	武田 唯	京都建築大学校 建築学科	7
10	のやまいきのみち —北摂三田ウッディタウンの50年—	白神 萌江	明石工業高等専門学校 建築学科	6
⑪	海図の記憶 牡蠣の養殖による水質浄化と水陸両用公園計画	矢野 高輝	京都建築大学校 建築学科	6
12	彩都のやまと	陳 君賢	中央工学校OSAKA 住宅デザイン科	12
13	幼稚園のなかみを考える	木本 朱理	大阪工業技術専門学校 インテリアデザイン学科	19
14	Elderly Happy Town ～地域密着型 老後のライフスタイルの提案～	森本 紋子	京都建築専門学校 建築科二部	16

(受付順) 以上14点<No. 欄に○印のものは入選作品>

《工業高校建築科の部》

No.	作 品 名	学生氏名	所 属	図面枚数
1	総合体育館	八木 健	奈良県立奈良朱雀高等学校 建築工学科	8
②	GOTE —Gift of the Earth—	坂元 爽菜 芝 直子 多田佳奈海 松本 芳佳 安原亜花里 山口 達朗	大阪市立工芸高等学校 インテリアデザイン科	7
③	ニホンノビガク	松本 雅也	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	3
④	Let there be light ～神の光・街の照明～	生駒 夢叶	神戸市立科学技術高等学校 都市工学科	4
5	日本のオモテウラ	長谷川愛美 平田 友香 堀口 真緒 宮本 寛希 森 美里 山本 諒雅 吉田 花音	大阪市立工芸高等学校 インテリアデザイン科	10
6	おいでやす通り活性化プロジェクト	池 美優	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	4
7	平成の京町屋 光と風を感じる住まい	川脇 佳和 小林 未玖 南條 佑季 八尋 健太	京都市立伏見工業高等学校 システム工学科 住環境システムコース	1
8	平成の京町屋 風土になじむ京の併用住宅	板倉 大倫 大森 元貴 河野 啓太 徳島 良樹	京都市立伏見工業高等学校 システム工学科 住環境システムコース	2

(受付順) 以上8点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部

平成27年度近畿地区短大・高専・専修学校並びに工業高校

卒業設計コンクール（第70回）審査報告

審査員長 角田 暁治

平成28年4月7日（木） 審査会場・大阪科学技術センター（6階600号室）

審査員長（互選） 角田 暁治

審査員 伊丹 康二・末包 伸吾・竹口健太郎・野村 正晴・濱田 徹・堀口 徹
(50音順)

応募作品 短大・高専・専修学校の部 14点、
工業高校の部 8点 (別紙参照)

審査経過と審査講評

本審査を始めるにあたり、本コンクールの主旨と審査に関する内規、26年度の実績と本年度の応募状況を確認した。その後、互選により審査委員長の選定を行った。審査員7名のうち、2名が当日の都合により欠席であった。その2名の審査員は事前の審査を行っており、その結果を当日の記名投票の集計に加えることにより参加とし、当日は5名で審査を行った。まず、昨年の審査方法を確認し、今年度の審査方法を審議した。その結果、各審査員が全作品を丁寧に閲覧した後、「短大・高専・専修学校の部」の全14作品から3作品、「工業高校の部」の全8作品の中からも3作品を選んで投票し、その後合同審議を行い、内規の3作品内まで入選作品を選出することで合意を得た。

投票の結果、「短大・高専・専修学校の部」では、No.9とNo.11が過半数を超える得票を集め、入選作品候補として選出された。この両作品に関して、入選の妥当性について審議を行い、入選作品として選定することで全員の賛同を得た。講評の詳細は各選評に譲るが、両作品とも、卓越した造形力と美しいプレゼンテーションが高く評価された。残る1作品については、得票数が過半数以下のNo.2、No.3、No.4、No.5、No.6、No.7、No.8、No.10について議論を行った。各案の評価点や疑問について審議を行った後、得票数も多く、拮抗する力の感じられるNo.2、No.6、No.7の3作品について、各審査員がいずれかの作品に1票を投じる決選投票を行った。その結果を踏まえつつ、対象の3作品について再度の審議を行い、リサーチからディテールまでの一連の流れが構築されている点を評価して、No.7を入選作品として選出した。残念ながら選に漏れた作品については、No.2は子供の創作姿勢から建築の根源的な側面を探ろうとしたものであり、着眼点の面白さや素材に対する認識、また実際にワークショップを行い結果につなげている一連のプロセスが評価されたが、新たな建築の設計への提案が希薄であることが惜しまれた。No.6は、賃貸集合住宅をリノベーションし、時代の変化に適応させていく過程を提示するものである。作品にかけられた労力の多さと、変化のプロセスが示す説得力が評価されたものの、提案の独自性にやや物足りなさが残った。また、No.3はデンマークの国際裁判所における設計提案であり、No.4はハニカム形状を利用した作品である。いずれの作品もヴォリュームの構成に卒業設計作品としての勢いを感じさせ、独自性の感じられる提案となっているが、現代という時代性との関係において疑問点が残った。No.5は、三角形に着目して大胆に建築を構成した元気な案であるが、設定されたコンセプトと用いられている形態の関係に説得力が感じられなかったのが惜しまれる。No.8は、作者の自宅改修をテーマとした作品である。身体性に根差した思考を空間構成へ展開している点は評価に値するが、もう一步の洗練が望まれた。No.10は住人の変化に追随し街区に手を加えるプロセスを提示する時代の変化をとらまえた提案であるが、パーゴラを用いた手法が一般的なものに留まっていることが惜しまれた。

「工業高校の部」では、投票の結果、No. 2、No. 3、No. 4 の 3 作品が過半数を超える票を集めた。それぞれの作品について審議を行い、これらの 3 作品を入選作品として決定した。詳細は各選評に譲るが、いずれの作品からも作者の想いとエネルギーが感じられる力作であった。残念ながら選に漏れた作品についても、そのいずれもが丁寧かつ真摯に課題に取り組む作者の姿勢を感じさせたことは申し添えたい。

「短大・高専・専修学校の部」の応募作品は、今年の 19 作品に比し、今年度は一昨年と同数の 14 作品へと若干の減少が見られた。また「工業高校の部」は、昨年 5 作品であったところが、今年度 8 作品へと増加した。本コンクールは、学生にとり、自らの思考を社会に問うことのできる貴重な機会であり、今後も参加校のさらなる増加を期待したい。

最後に、両部門ともに今年度の参加作品の傾向として、社会性との関連を保持しつつ、その関係性を担保しながらアイデアを造形化しようとする作者の想いが、多くの作品において見られたことは嬉しい限りであった。建築というフィールドで出来ることを追究する姿勢として、高く評価したい。

(角田)

趣味建築

石崎了一朗君 (大阪工業技術専門学校)

二畳の空間づくりを通して、自らの手で空間を作ることを提案した作品である。空間づくりを住人の手に取り戻すという重要なテーマを含んだ提案であり、作者自身による試行錯誤の製作プロセスも記録的に表現されているため、作品を読み進めるにつれ自分が空間づくりを行っているような錯覚にさせる魅力的な作品である。また、二畳という広さに意味を見出し、身体性の高い空間を作り出している点も評価に値する。一方で、この作品が、自らの手で空間を作ることを社会に対して提案する作品なのか、作者自身の二畳の空間自体が作品なのか曖昧である。前者であるならば、自分に合った空間を作れることが大きなメリットであるため、汎用性や発展性なども含めた提案が欲しいところである。後者であるならば、成果物に対する検証の中でもう少し作者自身の存在を前面に出し、自らの手で空間を作り使うことの評価が欲しいところである。その作品の位置づけは作品のタイトルに表れることが一般的であるが、タイトルからはその位置づけが読み取れなかった。

いずれにしても、自らの「原寸エスキスを行う」という体験に始まり、手を動かしながら空間を作ることの意味を発見し、実践している点は高く評価できる。これからも実践を通して自らの手で空間をつくることの楽しみや意味を発信し続けてほしい。

(伊丹)

逃げ場のないまち

武田 唯君 (京都建築大学校)

南海トラフ地震への漠然とした不安が漂う紀伊半島、和歌山県由良町に対して、海沿いの低平地に立つ集落を斜面地に段階的に「事前移転」させる仕組みの提案。移転を促す先行プロジェクトとして山の上に建設されるミュージアムは、平時は地域資源のアーカイブや来街者を受け入れる中短期滞在施設、災害時には仮設住宅として機能する。斜面地への暮らしの移転は、住居のすべてではなく、低地に母屋を残したうえで一部だけのある種の「離れ」として移転する。山の離れと低地の母屋はふたつでひとつの住居となり、ふたつの地形を横断する「地域内二拠点居住」という暮らし方がイメージされている。東日本大震災以来、日本各地の低海拔地域を包む漠然とした不安を受け止めたうえでの将

来像の提案に挑んでいる点、この提案の多層性と時間的スケールなどが高く評価された。集落の記憶をアーカイブする空間的実践、事前移転、地域内二拠点居住といった個々の要素は、すでに過去の震災、あるいは近年の震災からの復興や教訓としてすでに実践されているものでもある。それらを調べたうえで再検証するプロセスを経るとより生き生きとした、説得力のある提案になったかも知れない。
(堀口)

海図の記憶 牡蠣の養殖による水質浄化と水陸両用公園計画

矢野 高輝君 (京都建築大学校)

プレゼンテーションが秀逸であった。一枚目の図面に大きな断面図がある。海と陸の境界に牡蠣の養殖場をつくるという。また、副題に水陸両用の公園であると。その断面図には、海と陸の隙間に三角形分割された屋根と微細な起伏のある層がいくつかあり、水平に長くある隙間がその建築であることが分かる。つまり一枚目に中央に大きく美しく描かれた、形の問題であると宣言しているのだ。2枚目以降をみても、配置図、平面図、形の根拠を海図や地形と説明するダイアグラムも繊細にかつ図面密度もバランス良く描かれ、やはり建築のプロポーション、線のコンポジション、敷地周辺の表現方法が気持ちよくレイアウトされているのが分かる。そういった美的な感覚は、養殖現場のパレットを模型台として用い、金属のメッシュで、つまり半透明な素材を用いたゆるやかに自然と融合していくような形状の皮膜（屋根）やスラブが、複層重なりあうことを一目で表せていることにも一貫している。抽象模型に加え、敷地と融合する模型も丁寧に撮影されている。プログラムや敷地の適合性を問う以前に、上記のように設計したい形を追い求める集中力と表現力を高く評価した。

(竹口)

GOTE —Gift of the Earth—

坂元 爽菜君 芝 直子君 多田佳奈海君
松本 芳佳君 安原亜花里君 山口 達朗君
(大阪市立工芸高等学校)

地球からの贈り物である光、影、風、雨、虹、緑これらを再認識させるため、空を見上げることを企図した計画である。都市中心部にありながら緑と川に囲まれ、近年様々なイベントが行われる大阪中之島公園の中心部に設けられた図書館・カフェ・プレイルームからなる滞在を主とする施設である。特筆されるのは、平面構成におけるフラクタル理論の適応であろう。自然との親近性あるフラクタル理論をもちいたことにより、正円の中に様々な大きさの正円が接し、内部の様々な展開する空間は、全てが一つの原理のもとにあるものであり、一つの有機体— それこそが地球からの贈り物であるが—となるのである。

このフラクタル理論によりを適応して構成された平面を、有機的な形状の屋根が覆う。屋根には様々な開口が設けられ、作成者らのコンセプトである「地球からの贈り物」を体感することとなる。平面構成の形態的コンセプトの明快さに比して、ややその構成に甘さが見られる断面構成ではあるが、コンセプトを平面・断面構成に明確に反映させたものとして高く評価された作品である。

(末包)

ニホンノビガク

松本 雅也君（大阪市立工芸高等学校）

京都嵐山での美術館の計画である。このロケーションでの建築にあたり、京都—日本—和といったキーワードで思考がめぐらされたと思われる。ともすると、伝統の形の踏襲、周辺環境との調和を第一義とした計画になりがちなのだが、「ニホンノビガク」というタイトルには日本らしさを表現するのに、単なる和のデザインの踏襲ではなく、日本の美を別の角度から捉えなおして表現したいという作者の思いが感じられる。

分棟配置によるボリュームの低減、各棟の間に生まれる路地や中庭空間、そして内部空間と外部空間のつながり等に日本建築の空間構成の引用が見てとれる。また、大規模、小規模、企画の各展示室や、体験スペース等のコンテンツ、とりわけ外構計画についてはエントランス広場、中庭、屋外展示スペース等、密度の高い書き込みがなされ評価できる。各展示棟を移動するときに和風庭園の四季の移ろいを感じ、人工の映像と自然のコラボを楽しんだりできる提案には、スケッチもあいまって臨場感を感じる。

ただ、陸屋根のボックス、ポリゴンドーム、三角錐からなる群造形による外観が、実際にこの敷地・環境の中の建築としてどうかということについてはもっと深い考察と説明が欲しかった。今後のさらなる研鑽を期待したい。

（濱田）

Let there be light ～神の光・街の照明～

生駒 夢叶君（神戸市立科学技術高等学校）

神戸岡本に居場所をもとめた教会堂の提案である。教会堂空間の全体が、天から降臨する衣をイメージしたとする特徴的な形状をもち無数の彩色窓が穿たれた大屋根に覆われている。一見すると、造形一辺倒の偏った提案のようであるが、図面を見ながら文書を読み進めていくと意外なほど諸室の配置や使い方に配慮された、さらりと現実に着地した案であることが読み取れる。細かく見ていくと、子ども室と台所兼調理室の接し方や、事務室・牧師室の空間の位置と開口部のとりかた、特徴的な大屋根の構造と架構形式のあいまいさなど、いろいろと口を出したくなるころはある。しかしながら、強い空間的イメージ、体感的効果を建築空間において実現しようとしながらも、同時進行的に機能的な配置構成にきちんと配慮しようとする設計者の建築設計への姿勢が随所に垣間見える。その設計への姿勢に深く共感すると共に、設計者の建築家としての可能性を感じさせてくれた作品である。

（野村）